

27 高次脳機能障害のある患者の看護行為の内容分析

～参加観察法による看護行為の分類～

病院看護部 宮坂良子 新家尚子

【目的】

高次脳機能障害患者の回復期におけるケアは、在宅あるいは社会復帰に向けて日常生活の中で見守り、確認などに時間をかけて繰り返し関わっているが、看護必要度には反映されない看護行為が多い。そこで、高次脳機能障害という注意・記憶・遂行機能障害に関連した、看護行為の質をどのように測ることができるのか、新しい視点を導くために、現在行っている高次脳機能障害患者特有の看護行為を明らかにすることを目的とした。

【方法】

- 1.高次脳機能障害の診断を受け入院した患者に対して、看護師が行っている看護行為を参加観察法により記述した。類似する看護行為をコード化し、看護行為の要素を分類した。
- 2.データ収集期間は平成23年6月～9月、参加観察対象看護師はのべ11名であった。

【結果】

1.データの概要

看護師が行った看護行為は126コードと8カテゴリー《確認》《見守り》《声かけ・促し》《指導》《瞬間視》《行動を手助けする介入》《搜索》《傾聴》に分類できた(表1)。

2. カテゴリーの全体像

1) 高次脳機能障害患者への看護行為の流れ

看護行為は単独で行われている事は少なく、常に行われている看護行為と、行為の完遂がない場合に随時展開される個別的な看護行為とに分けられた。一連の流れは、見守り→確認→声かけ・促し→介入→指導のように展開されるが、対象や事象により異なっており繰り返されていた。

2) 高次脳機能障害患者の看護行為の流れを決定づける要素

看護行為の流れを決定づける要素には《患者の安全に価値を置く看護師の考え》《患者の認知の確認と育成》《患者自身の行為の完遂度》があった。患者に対する看護行為は、この3つの要素が根底にあり、左右されることが分かった。

【考察および結語】

日頃行っている高次脳機能障害患者への看護行為は、繰り返し時間をかけて行っている事が多い。監視センサーやコールマットが鳴るたびに患者の安全、所在確認を行なっている。またADL動作全般への繰り返し行っている促しや声かけ誘導も、回数に対しては看護必要度の評価の対象にはならない事が調査内容の中に見られた。また自分が何をすればよいのかがわからず、混乱している状態の記憶障害者に対して、落ち着くように時間をかけて対応する傾聴なども、カテゴリーに抽出されたが看護必要度には反映されない。

リハビリテーション病棟は、急性期とは異なる質の看護が要求される。今回看護行為の内容と、決定づける要素を明確化することで看護行為と看護必要度の関係を検討する事ができた。今後、高次脳機能障害患者に行っている看護行為が反映される看護必要度の評価表が望まれる。

表1 高次脳機能障害患者に対する看護行為

看護行為の カテゴリー	内 容	看護行為の実際
1.確認	患者の所在、安全、遂行力、注意力、動作、行動を確かめる行為。	・日頃から自分と他人の物の区別がつかない患者が冷蔵庫から飲み物を出している為、間違えないか傍で確認した。
2.見守り	患者の所在、安全、遂行力、注意力、動作、行動に注意をして、直接的な手助けをせずに見届ける行為。	・立位が不安定でナースコールを押すことの出来ない患者のトイレ動作を見守り、トイレの外で危険防止のため待機した。
3.声かけ 促し	ある行動を起こす事が困難な患者に対して、行動を開始・発動する為に動作を誘導する行為。	・発動性低下のある患者が食事の際に手が止まってしまうため、その都度促しの声かけを行った。
4.指導	言葉により知識を提示し導くことであり、本人が気付かないことに対して教え導くこと。	・注意障害のある患者が左側にいる患者に気付かずぶつかりそうになるため注意喚起した。
5.瞬間視	意識的に繰り返し行う看護行為で、サーチライトのように周囲一帯を見まわし、瞬間的に見て確認するわずかな間隔で視線を送ったり外したりする見方。	・エレベーターが開くごとに離棟者がいないか瞬間視した。 ・場所見当識障害のある患者が洗面所に行けるか後方から見守りながら、食堂の内服介助のある患者の摂取状況を瞬間視した。
6.行動を 手助けする 介入	声かけ、促しをしても遂行出来なかった事に対して、直接手助けするような看護行為。	・記憶障害のある患者が食堂の席が分からず迷っているため声かけ誘導した。
7.搜索	記憶障害がある為病棟に戻れない患者が、離棟あるいは居るべき場所にいない場合、所在を探し出す行為。	・患者のセンサーが鳴っているため、所在確認し本人不在のためスタットコールを行った。職員全体で搜索し駐車場を歩いている患者を発見した。
8.傾聴	患者の語りを真摯に聴く行為。思考の混乱に寄り添い、付き合いながら、時には指導や説明の看護行為へとつなげるもの。	・記憶障害のある患者が昼夜問わず10分おきに「自分は何をしたら良いか」などナースコールあり。他の患者が夜間起き出さないよう不穏状態が落ち着くよう対応している。